# 藝大通信

GEIDAI TSUSHIN

27

SEPTEMBER 2013
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

## 山村浩二

受賞教員インタビュー

[第六回] 卒業生に聞く。
渋谷慶一郎

[第十回] 受賞学生インタビュー
永田康祐｜務川慧悟｜大門光

[第十九回] 教員は語る
露木雅弥×桝井省志

[第八回] 上野の寄り道散歩道「登録有形文化財」

[第六回] 研究室探訪
美術学部先端芸術表現科

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No.27 SEPTEMBER 2013

編集発行 東京藝術大学藝大通信編集部

KOJI YAMAMURA

# 山村浩二

受賞教員インタビュー 第8回

## 〝アニメーションの独自性を一貫して追求〟〝世界的な注目の的となっている〟として第三十回川喜多賞を受賞。

Photo by Hiroaki Horiguchi

理解しています。その点では僕も海外で活動をしてきましたので、その成果を認めていただけたのでしょう。ヨーロッパ、ロシア、カナダといった国々の影響でアニメーションをつくり始め、「マイブリッジの糸」もカナダと日本の共同制作です。それでもやはり僕の作品は日本的であると言われる。それは題材よりも、絵の奥行きやナラティブの方法、編集なども含めた映像言語としての語り方に違いが感じられるからだと思います。

「マイブリッジの糸」はこれまでの作品のなかで最もプライベートな作品だと思っています。個人的な経験と感覚を前面に出しつつ、映像史や芸術史とうまくリンクできないかと考えてつくりました。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」が受賞されていて、これまでの社会的認知度が高い方々とは違う視点から自分は選ばれたのだと思いました。

川喜多賞は、海外で日本映画を広めた方々が受賞の主な対象かと

### 海外からの影響、海外の評価

受賞の知らせを聞いたとき、本当に自分でいいのかと恐縮しました。これまでの受賞者には映画関係の錚々たる監督、役者さんが多いですし。前回、団体として初めて


第27号 目次

02 受賞教員インタビュー 第8回 山村浩二
04 geidai gallery vol.7 深井隆 月の庭 星が降りた日
06 教員は語る 第19回 露木雅弥×桝井省志
09 受賞学生インタビュー 第10回 永田康祐 務川慧悟 大門光
12 TOPICS 映旬 美旬 音旬
20 卒業生に聞く。第6回 渋谷慶一郎
22 研究室探訪 第6回 美術学部先端芸術表現科・大学院美術研究科先端芸術表現専攻
24 上野の寄り道 散歩道 第8回 登録有形文化財
26 上野の杜の波瀾万丈 第16回 作品展示施設の昔 吉田千鶴子
28 展覧会&演奏会情報 興福寺創建1300年記念 国宝興福寺仏頭展／藝大プロジェクト2013「消える昭和〜その時、世界は？」シリーズ
30 NEWS 2013.02 〜 2013.07
編集後記

新しい段階へのステップは踏めたと自覚していますので、ここからまた違うことを探っていきたいと思っています。

自分の意識としてはやはり作家活動が中心で、教育はそれに付随するものだと思っています。僕が作家をやめてしまったら、教員としての価値もなくなる。僕自身、先人の背中を見て、多くを学んできましたから。

## 疑いを持つということ

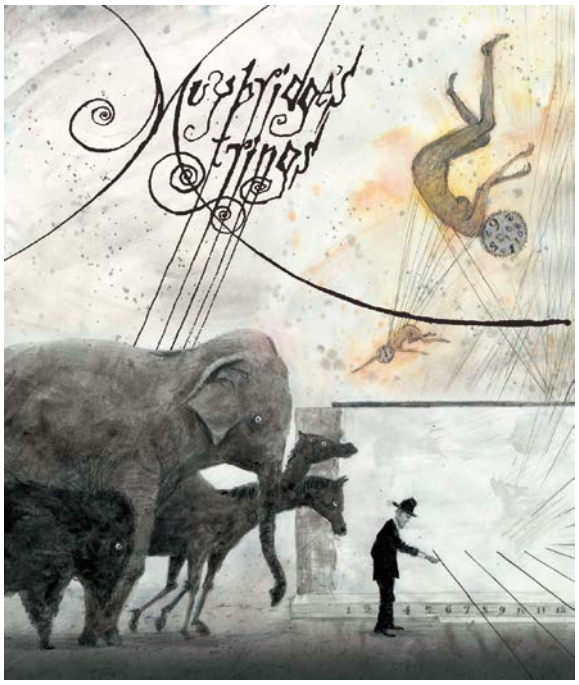
アニメーション専攻はこの五年間手探りでやってきましたけれども、学生たちが精力的に創作に向かってくれたおかげで、二年目にはオタワとザグレブの国際映画祭で学校賞をいただきました。また毎年、学生作品が国際的な賞を年に何回かは受賞していますから、存在を認知され、礎ができてきた。だからこれからのアニメーション専攻は、次の段階に向かっていくことになるでしょう。

一年次に必修の座学の講義を受け持っているのですが、そこでは知識を一方的に話すというより、疑いを持つようなきっかけを与えて、「なぜつくるのか」ということに覚醒してもらいたいと考えています。「疑いを持つ」ことは、作家がなにかを創造していくにあたってとても重要だと思います。分からないから作家はものをつくるのです。

実際にいま芸術やものづくりの価値観は多様になりすぎていて、どこによりどころを持てばいいのか誰しもが分からない状態だと思うのです。そういうなかで、スケールの大きなクリエイターが見当たらない。ある特化した部分ではすぐれているのだけれども、分野を横断するような、創作物としての広がりが少ない。

学ぶということでいうと、これまでの価値を一度崩して、これでいいのかというところから出発する必要があります。その考えるメソッドが自分のなかにできれば、どのような状況にも対応していけるし、次の手段なり考えを持つことができる。

映像というのはやはりアクティブなものであり、美術館におさまって鑑賞されるものではありません。見ているその瞬間になにかが活性化していく。アニメーションの力はそういうところにあると思うのです。



「マイブリッジの糸 Blu-ray」販売元: 紀伊國屋書店
©2011 National Film Board of Canada / NHK / Polygon Pictures

山村浩二（やまむら・こうじ）
教授―大学院映像研究科アニメーション専攻
一九六四年生まれ。東京造形大学卒業。二〇〇二年「頭山」がアヌシー、ザグレブをはじめ世界の主要なアニメーション映画祭で六つのグランプリを受賞。二〇〇四年文化庁・文化交流使としてカナダで活動。二〇一二年カナダ国立映画制作庁との共同制作で「マイブリッジの糸」が完成。二〇一二年に日本映画の芸術文化の発展に甚大なる功績を残した個人または団体、映画を通じての国際交流に顕著な功績を残された個人または団体に贈られる川喜多賞を受賞。日本アニメーション協会副会長、ASIFA日本支部理事、ヤマムラアニメーション有限会社代表取締役、比治山大学短期大学部客員教授、東京造形大学客員教授。二〇〇八年より東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻教授。
http://www.yamamura-animation.jp/

藝大通信
No.27
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第27号

■編集発行
東京藝術大学藝大通信編集部
■編集委員
松下 計（美術学部デザイン科准教授・編集長）
八谷和彦（美術学部先端芸術表現科准教授）
吉田浩之（音楽学部声楽科教授）
鈴木純明（音楽学部作曲科准教授）
磯見俊裕（大学院映像研究科映画専攻教授）
大石 泰（演奏芸術センター准教授）
■アートディレクター
松下 計
■表紙デザイン
松下 計
■表紙撮影
堀口宏明
■撮影
堀口宏明
永井文仁・塚田史子（美術学部附属写真センター）
■制作
株式会社 平凡社
■発行日
平成二十五年九月六日

■お問い合わせ先
東京藝術大学総務課
〒一一〇―八七一四 東京都台東区上野公園十二―八
電話 〇五〇―五五二五―二〇二六
FAX 〇三―五六八五―七七六〇
E-mail toiawase@m.geidai.ac.jp
URL http://www.geidai.ac.jp/

美術学部彫刻科―教授　深井隆『月の庭―星が降りた日―』二〇一一年

第19回

# 教員は語る

## 桝井省志

大学院映像研究科映画専攻　教授

映画「舞妓はレディ」より　提供：アルタミラピクチャーズ

### 伝統を活かしていくには

**桝井**　私がいま製作している撮影中の映画は、露木先生のお世話になっているんです。先生からご推挙いただいた日本舞踊専攻出身の花柳達真先生にご指導いただいておりますもので、お礼を申し上げなければいけないと思っていたところでした。

　今回の映画は周防正行監督の新作で「マイ・フェア・レディ」をもじりまして「舞妓はレディ」というミュージカル映画なんです。舞妓さんの世界の話なものですから、日本舞踊の専門家にご指導を仰ごうということで、露木先生にご縁ができたというわけです。

**露木**　私もほんとうに驚きました。花柳達真さんは日本舞踊専攻の二期生なのですが、京都の五花街の一つ、上七軒歌舞会に代稽古に行ってもらっているんですよ。

**桝井**　今日はこういった場所でお目に掛かれてほんとうにうれしいです。

　私自身、藝大では今年から映像研究科大学院のプロデュース領域の指導をしています。

　監督、脚本、撮影、美術、編集、サウンドデザインといったアーティスト、表現者として技術を磨くという領域とは異なり、プロデュース領域は、映画企画を立ち上げ、資金を集め、製作、公開し、そしてその資金を回収するまで、撮影現場の仕事はもとより映画事業そのものを構築する仕事を学んでいこうというものです。芸術表現とビジネスの折り合いをつけていく領域ですから、大学で学べる部分はあるものの、やはり実社会に出ていかないと最終的に学ぶことができない。昨日も学生を周防組の撮影現場に連れて行きましたが、私は現場出身のプロデューサーですから、映画をどうやってつくっているかを肌で感じてもらいたいんです。

**露木**　不躾な質問ですが、プロデュース領域を修了しますと、いちばん最初に就く仕事というのは、撮影現場なのでしょうか。

**桝井**　はい、そうです。ところがそこがほんとうに難しいところで、映画の現場は実際に仕事をしてみないとわからないことだらけなんです。

　私自身も見よう見まねで、ある種の徒弟制度のような形で経験を積んできました。現場の仕事はだれも教えてくれないのです。かつての映画会社というのはそういう意味で、先生方の伝統芸能に近いのかもしれません。ですから、授業のなかで体系的に教えていくということが、本来は不向きな領域なんです。

　スタッフやキャストに適材を配し、全体を構築するのがプロデューサーの仕事ですから、撮影、録音、編集といった専門技術とそれ以外のすべてにかかわることになります。一方で表には出ない仕事なので、仕事の中身を理解してもらうのはなかなか難しい。自分の経験をどうやったら伝えられるのか不安を感じながら、手探りで教えているところです。

**露木**　日本舞踊の指導で、映画のお手伝いをさせていただいた機会はこれまでにも何度かあります。最近では、阿部寛さんと広末涼子さんの「バブルへGO!!」に協力させていただいてきました。大河ドラマの所作指導にも行くのですけれども、いまの俳優さんは日本舞踊の基礎をご存じない方がほとんどです。

　たとえば、ふだんから着物の生活をしていれば変わってくるんですけれども、いまはそういった習慣がありませんからね。舞妓さんでも「おたの申します」と入門してから最低一年間は修業するんです。そうするとお座敷に出るときには、別人のように変わります。

　私は父も祖母も日本舞踊をしておりました。

# 露木雅弥

音楽学部邦楽科 准教授

藝大への期待・抱負・提言

「日本舞踊×オーケストラ」提供：東京文化会館 撮影：青柳聡

住まいは浅草で、近くに千束通りという商店街があるのですが、子どものころ、商店街の娘さんはみんな花柳流の名取でした。いまバレエやピアノを習いに行くような感覚で、日本舞踊をたしなんだのだと思います。

当時は名優の舞台を見てこいと言われて、それで学ぶことが多かったのですが、いまはそういう対象もなかなかございません。ですから桝井先生と同じで、技術は教えられるけれども、内証の部分は伝えにくい。そう意味では学校教育に戸惑う部分はあります。

**桝井** ほんとうに痛感しています。ただ着付けの専門家がいて衣装を着れば成立する世界かといえば、決してそうではない。理屈ではわかっておりましたけれども、やはり難しい世界だということを実感しました。洋装の日常の中に、いきなり和の所作を取り入れようとしても簡単にはいきません。

私は映画会社の大映の出身で、先輩方がつくってきた作品といえば、溝口健二監督の「近松物語」のように徹底した美意識がそこにはあります。日本の文化を継承し、それを活かしながら、贅沢に映画をつくることができたうらやましい時代です。吉村公三郎監督の「源氏物語」など、長谷川一夫さんをはじめとする出演者は当然のこと、美術、衣装、すべてがほんとうに美しいのです。画面を見ているだけでも幸せで、夢見心地になる。ああいった美意識がいま、日本映画にどこまで残されているか。いまからでも遅くないですから、露木先生をはじめとした諸先生方からご指導をいただいて、美意識の伝統の香りだけでもとどめていかなければならないと思うのです。

## ジャンルの垣根を越えて

**露木** 日本舞踊をやるには、周辺にある芸能や日本の古典文学を知らないと、自分の表現はできないと思います。そのための努力をしているか、していないかで俳優さんも変わります。自分が一流になろうと思うのであれば、進んでそういった勉強をするべきではないでしょうか。

**桝井** 先生がおっしゃるようにほんとうの意味で技量を磨くには、そういった根本から勉強をしておかないと、役者として続かなくなる。壁にぶち当たるでしょうし、そこから何を獲得すべきか自覚するところから役者修業が始まるのでしょう。ですから俳優業こそ学校で学べるシステムをつくり、早い時期から教養を身につけることができるとよいのですが。

教員の立場から材料を提示することはできます。その一方で、自分で見つけて何かを探し出すという気持ちを持たせることも重要です。だからある部分では突き放しながらも、どういった指導をしていくべきかは悩んでいるところですね。

**露木** 藝大では副科の授業で日本舞踊を学ぶことが可能になっています。声楽科でオペラを専攻している学生が受講しているケースがよくあります。受講者は、日本舞踊を学ぶと楽しいしとても役に立つと言ってくれます。日本舞踊の稽古をすると、声がうんと出るようになる。丹田に力が入るので、レッスンがあった日は声がよく出るのだそうです。

私自身いろいろなことに取り組んでいまして、この十月には、東京文化会館でオーケストラと一緒にラヴェルの「ボレロ」をやります。昨年、狂言の野村萬斎さんを中心に、四十人ものメンバーで演じたのですけれども、とても好評で、また違った形で再演することになりました。

日本舞踊も将来にわたっては変わっていかな

ければならないと思うのです。そのためには、新しい振り付けをできる人たちを育てていく必要があります。古典を学び、さらに革新していかないことには、日本舞踊の二十年後、三十年後はなくなってしまう。振り付けができる人、映画で言えば作家を育てていくということだと思います。

**桝井**　せっかくこういう場があるのですから、若い人たちには、伝統的なものをぜひ勉強してほしい。ほとんどの学生が、映画だけを見ていればよい映画を作ることができると思っているけれど、決してそんなことはありません。極端な言い方をすれば、映画を見なくても、ほかの領域の優れた表現をなるたけ多く見て、そこから何を吸収できるかにかかっているのです。露木先生も「ボレロ」の演出をなさっている。この大学のなかで垣根を越えて、いろいろな先生の話を聴いてほしい。とくに映画のプロデュースに携わっていきたいのであれば、ほんとうにさまざまな知識がないことにはできないと思います。

　また、大学院映像研究科は、座学が中心ではなくて、毎月のように作品をつくっています。するとやはりプロの中に入り、プロの仕事を盗むというチャンスを提供していかないと進歩がないのではないでしょうか。授業としてどのような形で取り込むことができるかは、大きな課題です。けれども、実際の現場で物を見るという経験を積ませておかないと、学校を出たあと、世間に出て通用しないんです。そこで映画界のいろいろな方々に協力を仰いで、どんどん藝大の学生が外に出ていけるようにしたいと思っているのです。

**露木**　桝井先生と全く同じ意見です、舞踊家もやはり、一〇〇回稽古を積むより、一回舞台に出たほうが実になることは多い。ですから、本格的な舞台を踏む機会を、大学のなかでも増やしていっていただきたいのです。たとえば、せっかく先生がいらっしゃるのですから、映像と伝統芸能のコラボレーションが学内で実現してもよいのではないでしょうか。

## 作家を育てるという使命

**桝井**　時代の流れが速いものですから、そのときのタイミングで映画が当たる、当たらないということもあります。

　私たちは、自分たちにとって関心のあるものを映画にしてきましたが、生と死をテーマに扱うような重苦しい映画は、それほど簡単にお客さんに足を運んでいただけないのが実情です。映画というのはやはり娯楽ですから、観に行って楽しい気分で帰りたいのが人情でしょう。それでも私たちは重い題材もとりあげます。作り手としては、やはりそういった部分がないと映画をつくる意味がないと思うのです。

　いまの時代で驚くことは、「映画はビジネスだ」と考える学生が意外と多いことなんです。興行成績がいちばんたいせつだという感覚を持つ人が多いことに、びっくりします。でも、映画というのはそれだけではないということを、まず芸術表現なんだということを指導しなければいけない。

**露木**　舞台も同じで、ブロードウェイにしてもウエスト・エンドにしても、技術的にたいへん優れた、ストレート・プレイのすばらしい作品がある。しかしそういうプログラムにお客さんが足を運ばなくなって、華やかなミュージカルにばかり人が入る。イギリスでは、ストレート・プレイにお客さんが入らなくなったら舞台芸術はもうおしまいだ、と危惧し、警鐘を鳴らしているのです。ショーアップされた舞台に人が流れていくのは、日本のみならず、世界共通の現象なんですね。

　一方で、マニアはマニアだけが理解し合える世界に没入してしまうというところがありますよね。能も狂言も日本舞踊もそうなのですけれども、それぞれの芸能にマニアがいるんですよ。マニアしか見に来ない、マニアが満足すればそれでよしとすることは、どのようなジャンルでも望ましいことではないと思います。

**桝井**　映画もイベント性がないとお客さんが集まらない、興行的に成功しないということで、話題のある俳優さんが出演する、あるいは原作が人気漫画である、話題の歌手が主題歌を歌っているといったことが、映画製作や上映の際の条件になっています。

　こういった考え方で映画をつくることも、決して間違いだとは言えませんが、それだけではほんとうに寂しくなります。映画人がいまこの時代にほんとうに誇りを持って見せたい映画をつくり、そういった作品によって業界が成立するということでなければ、大学で映画を教える意味がないのです。

　だから、作家性のある人たちを生み育てるということが、最もたいせつなことだと思うのです。マーケティングによって興業的成功だけを求める映画の人材育成はほかに任せて、傑出した作家を生み出すことに、大学の価値はあると思うのです。

桝井省志（ますい・しょうじ）
大学院映像研究科教授。
一九五六年愛媛県生まれ。
大映を経て一九九三年、アルタミラピクチャーズを設立。
劇映画プロデューサー作品として「シコふんじゃった。」「Shall we ダンス？」「がんばっていきまっしょい」「ウォーターボーイズ」「スウィングガールズ」「それでもボクはやってない」「ハッピーフライト」「ロボジー」「終の信託」などがある。ドキュメンタリー作品として「タカダワタル的」「ザ・ゴールデン・カップス　ワンモアタイム」「こまどり姉妹がやって来る　ヤァ！ヤァ！ヤァ！」「ダンシング・チャップリン」「オース！バタヤン」などがある。
二〇〇一年藤本賞奨励賞、二〇〇五年エランドール賞・プロデューサー賞奨励賞、二〇〇七年GARV賞（年間最優秀プロデューサー賞）、二〇〇八年エランドール賞・プロデューサー賞を受賞。
二〇一三年より現職。

露木雅弥（つゆき・まさや）
音楽学部邦楽科准教授。
一九六〇年花柳誠三郎を父として東京に生まれる。芸名花柳輔太朗。一九八二年東京藝術大学音楽学部邦楽科別科卒業。
一九七九年花柳流名取、一九八〇年花柳流師範、舞踊家・振付師として活動。一九九〇年文化庁芸術祭賞ほか受賞多数。
文化庁青少年芸術劇場、文化庁移動芸術祭、国立劇場主催公演、舞踊協会公演ＮＨＫなど舞踊公演に出演する一方「テンペスト」「Ninagawa マクベス」ほか商業演劇にも舞踊家として出演。
海外公演も多く、日米舞台芸術交流ニューヨーク・ワシントン公演をはじめエジンバラ国際演劇祭　ユーロパリアジャパンフェスティバルでフランス、ベルギーの五十都市を巡演。
二〇一三年より現職。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

「Tokyo Sonic Art Award」グランプリ受賞

# 永田康祐

◆大学院美術研究科建築専攻 修士課程２年

金田充弘先生の研究室に所属しています。ここは「構造計画第1研究室」となっていますが、構造家を育てることを第一の目的にしているわけではありません。構造に限らず、施工方法や素材など、建築をとりまく様々な技術的問題について、研究室では取り扱っています。

ただし、ぼく自身がもともと、いわゆる建築家よりも、構造設計者のアプローチに興味をもっていたことも事実です。ぼくが構造に惹かれる理由は、語弊があるかもしれませんが、建築における「形態」が純粋に好きだからです。建築のデザインは、単なる形態では済まされない複合的なものです。そういったなかで、構造という観点をもとに、力学を通じて形態にアプローチできるのではないかと考えました。力学と形態は、構造において不可分なものだからです。

建築、特に現代のものにおいて、構造は非常に大きな意味をもっています。たとえば自由な曲面を持つ屋根など、技術的問題の比重が大きい場面において、形態のほとんどは意匠設計者と構造設計者の対話によって決定されていきます。形態的な提案が、構造設計者から行われることさえあります。つまりぼくの場合、構造が建築の形態、造形を左右するということ自体に興味があるのです。

今回グランプリをいただいた「Tokyo Sonic Art Award」は、35歳以下の若手アーティストを対象に、音楽とアートにかかわる作品プランを公募し、その中から一組が選ばれるというものです。受賞作の「bio effector」は藝大大学院の音楽文化学専攻音楽音響創造修士過程の大野茉莉さんとの合作で、坂本龍一さんが総合アドヴァイザーを務め東京都現代美術館で行われた「アートと音楽ー新たな共感覚をもとめて」の関連企画として展示されました。

展示内容は、空間に吊った巨大な膜を、装置で検出した鑑賞者の血流の音によって振動させ、その振動を膜の張力変化によって制御することで、音楽のタイムラインをつくりだすというものでした。全体のコンセプト自体は大野さんによるもので、巨大なオブジェクトを可動させつつ、音と連動させることが実現可能かを、建築構造を学んでいるぼくに打診してきたのです。そこで、張力によって音の濃淡を変えることができる、膜を用いるのがいいのではないかと提案しました。

そういう経緯から制作したものですから、この作品には特に、構造的・形態的に何か特別なことをしようとは意識していません。鑑賞体験としては、会場に生々しい機械がゴロンと置かれ、奇怪な音を立てているというものです。ただし鑑賞者と作品が、見る―見られるという対立項ではない、環境的な体験を提供したかった。グランプリをいただけたということは、そういった意図が伝わったのだと思います。

「bio effector」（ディレクション・サウンド：大野茉莉　エンジニアリング：永田康祐）展示空間に吊った一枚の膜を、リアルタイムに検出される鑑賞者の血流の音で弦のように振動させる。その振動を膜の張力変化によって制御することで音楽のタイムラインを制作。弦楽器や鼓膜楽器とは異なる、環境と共存する巨大な楽器のような空間の制作を試みる。

ながた・こうすけ
1990年愛知県生まれ。2012年東京藝術大学美術学部建築科卒業。2012年同大学院美術研究科建築専攻入学。おもな受賞歴・展示歴として「五大学卒業設計合同公開講評会 山梨賞」受賞、日本建築学会技術部門設計競技「デジタルデザイン環境によって可能になる建築・都市」優秀賞受賞（御幸朋寿と共作）。2012年に「Tokyo Sonic Art Award」グランプリを受賞し、東京都現代美術館で展示（大野茉莉と共作）。

むかわ・けいご
1993年愛知県生まれ。愛知県立旭丘高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器学科在学中。現在、青柳晋、横山幸雄の各氏に師事。2008年第62回全日本学生音楽コンクール中学校の部全国大会第1位。2010年第3回神戸芸術センター記念ピアノコンクール感動賞受賞。同年第14回松方ホール音楽賞受賞。2012年第81回日本音楽コンクールピアノ部門第1位、併せて野村賞、井口賞、河合賞を受賞。

第81回日本音楽コンクール(2012年10月)
ピアノ部門での演奏
写真提供：毎日新聞社

第81回日本音楽コンクールピアノ部門第1位

# 務川慧悟

◆音楽学部器楽科ピアノ専攻2年

母親がピアノの教師で家にピアノがあったので、3歳の頃から遊び感覚で弾いていました。幼稚園のときからグループで楽しくソルフェージュを学ぶ教室に通っていたのですが、ピアノの個人レッスンを受けるようになったのは小学2年からです。

好きな作曲家は昔からずっとバッハです。小さい頃は、ロマン派の音楽に憧れている人が周りに多かったので、少し異色だったかもしれない。ぼくは物事を理論的に考えないと気が済まない性格で、感覚的に進めるのが苦手だったんです。バッハの音楽は、成り立ちや構造のほとんどを理論的にとらえることができるという意味で、当時のぼくには一番しっくりきたのです。もちろん今では様々な作曲家の作品を演奏しますし、中でもショパンはぼくのなかで特別な位置づけにある大好きな作曲家の一人ですが。

高校は地元愛知の普通高校です。音楽高校に進む道と相当迷ったのですが、ぼくが通った高校は、生徒の自主性を尊重し、目指したい方向性を応援してくれるところが魅力的でした。将来は音楽大学に進む、と高校入学前から決めていたので、あえて普通科に進んで様々な経験をし、幅広い視野に立った勉強もしたいと考えたんです。結果的に勉学やスポーツ文化活動に励む、色々なタイプの友だちもできたし、色々な視点から音楽をみることができるようになったのではないかと感じることがあります。

日本音楽コンクールの本選で演奏したのは、プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番でした。バッハ以外に、ドビュッシーやプロコフィエフといった近現代の音楽も、小さい頃好きでよく聴いていたんです。プロコフィエフの三番も、小学生のときから、マルタ・アルゲリッチのCDを何度も何度も聴いた思い出深い曲でした。

日本音楽コンクールは初挑戦でしたが、家族には「受けるからには1位をとる。」と宣言していました。でも実際に予選が始まると、1次も2次も通るか不安で、3次のときには演奏順が一番だったんですが、後の人の演奏がすべて自分よりレベルが高く圧倒されました。結果的に本選に進めたものの、こんなレベルの高いなかで自分が演奏してよいものだろうかと、精神的にかなり追いつめられました。

本選進出者は4人で、このときの演奏順は最後でした。同級生や友だちがみんなで励ましてくれたので、とても心強く、心の支えになりました。そのうえ会場の東京オペラシティはずっと憧れのホールだったので、そこでコンチェルトを弾けるというだけで、幸せに感じたのです。ですから順位よりも、楽しんで演奏を全うしようという気持ちのほうが強くなりました。

まさか1位をいただけるとは思っていなかったので、結果を聞いた瞬間は、驚きと喜びとで記憶がないくらいです。演奏への集中力、プロコフィエフの作品が持つ音楽のおもしろさを引き出していたところを評価していただきました。そして、小さいときから音楽の仲間と共に培ったアンサンブル能力を褒めていただいたのを、本当に嬉しく感じました。

第７回グラフィック「1_WALL」グランプリ受賞

# 大門　光

◆大学院映像研究科修士課程メディア映像専攻修了

グラフィック「1_WALL」のグランプリを受賞したのは、昨年、大学院映像研究科メディア映像専攻の修士２年のときでした。

大学は武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科で、純粋なデザイン以外に、マーケティングやブランディング、企画などをオールジャンルに学べるところでした。

大学入学までもふつうに絵は描いていたのですが、プロモーションビデオやコマーシャルフィルムといったショートフィルムに、当時は憧れていました。進路に迷っていたところ、美術予備校の先生から、「映像専門の学科に進むと映像しか学べないけれど、デザイン科は短い映像なら取り組むこともできる」とアドバイスされて、デザイン科を目指すことにしたのです。

大学の４年間は出足でつまづき、ふわっとした感じで終わってしまったのですが、４年生のとき、クリストフ・シャルル先生のメディアアートの授業を聴講した際、藝大の大学院映像研究科の存在を知ることができました。シャルル先生は藤幡正樹先生と交流があり、そこから藝大のメディア映像に進む人が多くて、実際にメディア映像の学生作品展を観に行ったところ、とても興味を覚えたのです。

グラフィック「1_WALL」に応募したのは、３度にわたる審査で、審査員の方からコメントをいただけるというのも魅力的に感じたからです。とくに最終選考では、すべての審査員から、作品の講評を受けることができるのです。受賞作品について言えば、小さいときから描いていた漫画の模写のようなものでは、自分で作品にはならないと思っていました。ところが１年のとき、友人から「すごくいいね」と言われて、驚きつつも、この絵ならずっと描き続けていけるという確信を得たのでした。

「1_WALL」の最終審査は、会場である銀座のギャラリー、「ガーディアン・ガーデン」のひとつの壁面に作品を展示するというものです。ところが私はそれまで、絵を使った作品の展示をしたことがなかったので、設営の当日になって、どうしようか迷ってしまったのです。一応、絵を額縁に入れた作品を準備していたものの、これではグランプリに選ばれないし、せっかくの機会なのだから自分にとって楽しいことをしよう、と思いたちました。そこでギャラリー担当者に「壁に直接描いてもいいですか」と尋ねたところ、大丈夫だということだったので、絵を壁面に描くことにしたのです。

グランプリをいただいた「ゲンガ」の作品タイトルは、所属ゼミの桂英史先生から、「絵自体は漫画みたいないのに、一場面しかないところが原画みたいだ」と言われたことが由来です。このタイトルが審査の際にも、様々な想像をめぐらせ、解釈や評価に力を果たしたようです。でも実は、私自身がこの作品タイトルとコンセプトを、まだ突き詰め切れていません。これからの課題として、「ゲンガ」の意味を深めていきたいと思っているところです。

「ゲンガ」2012年

だいもん・ひかり

1987年東京都生まれ。2010年武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科卒業。2013年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。大学院映像研究科在学中の2012年に第7回グラフィック「1_WALL」グランプリを受賞。2013年6月にはガーディアン・ガーデン（東京銀座）でグランプリ受賞者個展「ゲンガ」を開催した。

TOPICS OF
FILM AND
NEW MEDIA
2013.02-07

# 映句

## 1 アニメーション専攻 第四期生修了制作展

◎アニメーション専攻

三月八日から十日まで、本学横浜校地馬車道校舎において、第四期生修了制作展「GEIDAI ANIMATION 04 SAIL」を開催した。修了作品と一年次制作の計三十本近くの作品を上映し、ラッパーの宇多丸氏によるトークイベントと、ドキュメンタリー監督の松江哲明氏と山村浩二教授による対談を行った。また三月十六日から二十二日には、渋谷のユーロスペースにおけるレイトショー上映を行った。

## 2 現代映像プロデュース論 2012-2013

◎アニメーション専攻

アニメーションの名作はどのように生まれ、世に送り出されているのか、また業界の最前線で何が起こっているのかをプロデュースという視点から探る講座を一月十八日から五回にわたって開催した。徳島市でのアニメイベント「マチ☆アソビ」に見られる文化と場所の融合や、観客参加型アニメバトル「CGアニカップ」、個性あるプロダクションとして名高いボンズの舞台裏、ニコニコ動画の与えた影響と将来、そして二〇一二年度のアニメーション十大ニュースまで、最もホットな講師を招いて詳しく解き明かした講座となった。

## 3 映画専攻七期生修了制作展

◎映画専攻

三月十六日、十七日の二日間、横浜・馬車道校舎において、映画専攻七期生修了制作展を行った。『神奈川芸術大学映像学科研究室』『ビューティフル・ニュー・ベイエリアプロジェクト』『バイバイ、マラーノ』『友達』が上映され、それぞれ好評を博した。七月六日から十九日には、渋谷ユーロスペースでもレイトショー上映を行った。

## 4 Open Theater / Etc. 『Sonic Road Movie YOKOHAMA!』

◎映画専攻

三月二十三日、横浜・馬車道校舎において、映画専攻一期修了生の加藤直輝氏が監督した『Sonic Road Movie YOKOHAMA!』の上映会を行った。これは映像を上映しながら、その場で音をつけるというイベントで、好評を博した。

## 5 横浜市民公開講座 open THEATER/ex2 「ジョアン・ペドロ・ロドリゲス監督特別講義」

◎映画専攻

三月二十四日、横浜・馬車道校舎において、ポルトガルの映画監督ジョアン・ペドロ・ロドリゲス氏の作品上映と講義を行った。『男として死ぬ』(二〇〇九年)を上映後、映画評論家の大寺眞輔氏の司会による講義を行い、好評を博した。

## 6 オムニバス作品『らくご映画』封切

◎映画専攻

四月六日、映画専攻七期生制作のオムニバス作品『らくご映画』が劇場公開された。古典落語の『ねずみ』『死神』『猿後家』を原案にアレンジしたオムニバス形式の作品で、二年次の実習として昨年の七月に撮影されたもの。

アニメーション専攻第四期生修了制作展
アニメーション専攻
1

現代映像プロデュース論2012-2013
アニメーション専攻
2

5
横浜市民公開講座 open THEATER/ex2
「ジョアン・ペドロ・ロドリゲス監督特別講義」
映画専攻

映画専攻七期生修了制作展
映画専攻
3

右上から時計回りに、
『神奈川芸術大学映像学科研究室』
『ビューティフル・ニュー・ベイエリアプロジェクト』
『友達』
『バイバイ、マラーノ』

6
オムニバス作品『らくご映画』封切
映画専攻

Open Theater / Etc.『Sonic Road Movie YOKOHAMA!』
映画専攻
4

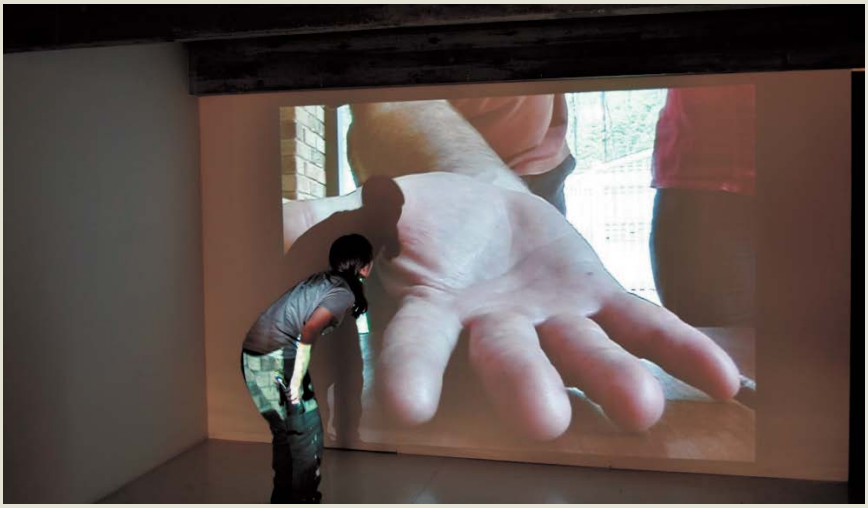
TOPICS OF
FINE ARTS

2013.02-07

# 美旬

展覧会「物質と彫刻―近代のアポリアと形見なるもの―」
上：2階展示会場　左下、右下：ギャラリートーク

1



2013　NEWS展　2

## 1 展覧会「物質と彫刻―近代のアポリアと形見なるもの―」

四月二日から二十一日まで、大学美術館陳列館において、彫刻科主催の「物質と彫刻」展が開催された。本展は本学彫刻科教員、教育研究助手六名と、学外から現在国内外で活躍中の作家五名を招き、展覧会が構成された。

会期中に行われたアーティスト・トークやシンポジウムには多くの若い学生が熱心に各作家の話を聞く姿があり、会場は足の踏み場もないほどの盛況となった。小企画ではあるが、ベテランから若手までが多種多様な物質に対するアプローチを行った本展は、学内外から高い評価を得られた。

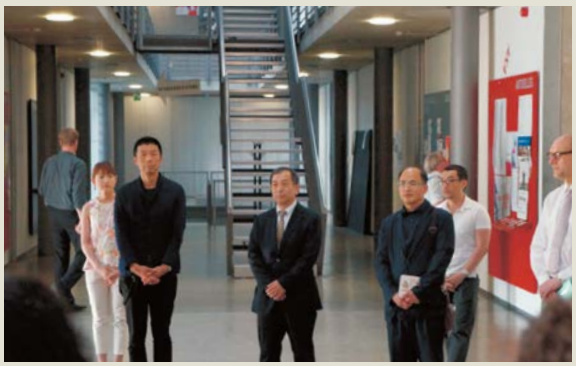
## 2 2013 NEWS展

六月十日から十四日まで、平成二十五年度に新たに油画研究室に加わった教員の制作作品を絵画棟1階アートスペース1・2（大石膏室手前）を展示会場として一堂に集め発表する展覧会（NEWS展）が開催された。

これは、在校生をはじめとした大学関係者、一般市民に広く制作・研究活動を紹介し、今後の大学での教育研究活動に寄与することを目的としている。この展覧会には今年度も、多種多様な表現形式をとった作品が集まり、「絵画・油画」を出発点とした表現が多様な展開の可能性を秘めていることを示す良い機会となった。

右上：ドイツブース展示風景
左上：日本ブース展示風景
左下：シュツットガルト美術大学

折り本ワークショップ



オープニング風景

版画第二研究室展「ずれた」 4

## 3

### Zig Zag 展（三國G国際交流展）

六月十三日から二十六日まで、ドイツ・シュツットガルト美術大学において、Zig Zag 展（三國G国際交流展）が開催された。

本展は、シュツットガルト美術大学の企画により、日本画研究室、ソウル大学の芸術家及びヨーロッパを中心に国際的に活躍しているアーティストを招待し、関係を繋ぐことを目的としている。

ジグザグ・ペーパー（日本では折り本・折り手本）と呼ばれる従来の東アジアの素材、および形式をテーマにそれぞれの解釈で実験的に試みた作品が展示され、国ごとに特徴のある展覧会となった。

## 4

### 版画第二研究室展「ずれた」

七月十日から十八日まで、版画第二研究室展「ずれた」が絵画棟1階 Art space 1、2で開催された。今年で二年目となる本展では版画第二研究室教職員四名と在籍する学生十二名が出品し、いわゆる一般的な版画領域から〝ずれた〟さまざまな作品が並んだ。初日のオープニングパーティーには学外からの来場もあり、出品者にとって貴重な意見交換の場となった。土・日・祝日を含めた九日間の展覧会は好評を博して終了した。

TOPICS OF
MUSIC

2013.02-07

# 音旬

**第10回日中音楽比較研究国際学術会議(楽理科)** 1
上：開会式後の参加者全員での記念撮影
中：研究発表会の様子
下：本会議の実行委員会

## 1 第10回日中音楽比較研究国際学術会議（楽理科）

三月二十七日、二十八日、アジア総合芸術プロジェクトの最終事業として、中国から招聘した音楽研究者三〇名と日本側研究者六〇名が参加し、標記会議が開催された。本会議は、一九九五年福建師範大学での第一回以来、隔年開催されてきたが、日本での開催は二〇〇一年沖縄県立芸術大学での第四回に次ぐ二度目である。両国の研究者は、本会議用に日中両国語で編集された論文集に基づいて、二会場に分かれて最新の研究成果を発表し合い、交流を深めた。二十七日夕には邦楽科の協力を得て能ホールにおいて歓迎演奏会が行われ、約百名の聴衆が間近に聴く邦楽（山田流箏曲・宝生流仕舞・長唄）の魅力を堪能した。会期中に満開を迎えた上野や谷中の桜の美しさも、中国人研究者を魅了した。

## 2 伊達ジュニアウィンドオーケストラとの合同演奏会

器楽科管打楽器専攻が昨年度より取り組んでいる「吹奏楽きらめき事業」は、福島県伊達市が行っている震災復興事業の一環である。その二回目となる合同演奏会「伊達ジュニアウィン

**2** 伊達ジュニアウィンドオーケストラとの合同演奏会

上：合同演奏会（指揮：山本正治教授）
右下：古屋大臣のクラリネット演奏
左下：藝大ウィンドオーケストラの演奏

**3** 能楽公演「夏目漱石の見た能　習った謡」

能「高砂」より
上：後シテ（住吉明神：武田孝史教授）
下：前シテ（翁：辰巳満次郎）、ツレ（姥：和久荘太郎）

ドオーケストラ×東京藝大ウィンドオーケストラ合同演奏会」が五月十九日、同市保原体育館で開催された。

この日は、伊達市と藝大の橋渡しをしていただいた古屋圭司国務大臣が、クラリネットを携えて登場、藝大ウィンドオーケストラをバックにモーツァルトの協奏曲第2楽章を演奏し会場を沸かせた。「この事業を通して一人でも多くの子供たちが音楽を一生の友として歩んでくれれば」という古屋大臣のメッセージに、文化芸術のもつ責任を改めて考えさせられたコンサートとなった。今年度は交流事業として、夏の吹奏楽コンクールシーズンに合わせた訪問指導や、秋と冬には学生が指導にあたるクリニックが予定されている。

## 3 能楽公演「夏目漱石の見た能　習った謡」

大学美術館にて開催の「夏目漱石の美術世界展」関連事業として六月二十二日、能楽公演「夏目漱石の見た能　習った謡」が音楽学部第4ホールにおいて開催された。

これは音楽学部と大学美術館が協力して行われた催しで、特に邦楽科を有する本学の利点を最大限に発揮したものであった。

漱石の作品や日記に登場する「能」の演目を取り上げて、独吟・連吟・仕舞・能の形式による実演を行い、文豪夏目漱石の新たな一面を示すことを目的とした公演は漱石作品への理解を一層深めることに繋がるものとなった。

当日は、ハガキによる応募での当選者（約一二〇名）でほぼ満席となり、観客に大きな感銘を与えた公演となった。

卒業生に聞く。

連載第六回

一九九八年 音楽学部作曲科卒業

# 渋谷慶一郎

在学中から作曲家、演奏家としての活動を展開。
新作ではメディアとしての「オペラ」の復活を企てる。

## アカデミズムからの抑圧と反発

受験のときから習っていた小鍛冶（邦隆）先生が、ぼくの入学とほぼ同じタイミングで作曲科の先生になられたので、その講座に入りました。当時から作曲はすごくしていましたね。一年のとき、学内演奏会ごとに、二、三曲は提出していましたから、かなり創作意欲が旺盛な（笑）学生だったと思います。

ぼくが作曲家をめざすに至るには、こういった理由がありました。中学時代のとき、ガンを発病し余命が限られた父から、「お前は将来何になりたいんだ」と聞かれたんです。そこで自分なりにさまざまな選択肢を考えた結果、ピアノを習っていたこともあり、作曲の道に進むことに決めたのです。

作曲家のなかでは、高橋悠治さんにとくに惹かれました。ピアノを弾いたり、コンピュータを扱ったり、舞台の上であたかも遊んでいるような感じで、自分にとっては、それはわかりやすくかっこよかった。高橋さんみたいなスタイルで音楽活動をして、それが生業になればいいなあと当時は素朴に思ったんですよね。

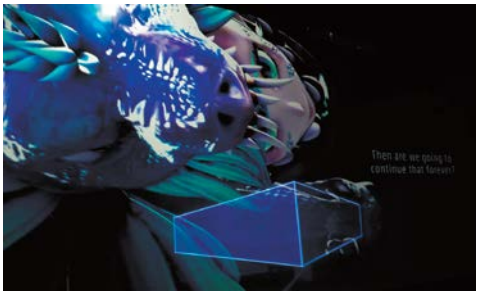
それで紆余曲折あって、大学二年のとき、高橋さんのコンサートの懇親会で、二時間くらい話し込みました。そしてそれからまもなくに、高橋さんと二台ピアノとコンピュータの即興で共演させてもらうことになったんです。

一方でぼくは、大学では抑圧されていたんですよね。小鍛冶先生は正統なアカデミシャンですから、そこから逸脱しようとする僕とは確執のようなものがありました。作曲の授業中にほかの学生などお構いなしに口角泡を飛ばすような論争をしたものです。でもいま思うとあれは正しかった。「好きなように作曲しなさい」なんていうのなら教わったりする意味はないんです。あと、本人の自主性に任されているような学生ほど曲を書かなくなるけど、ぼくはアカデミズムに対する反発をある種のモチベーションにしていたところがあった。だからある時期から、あのときの抑圧は、自分にとってプラスだったと思えるようになりました。ですから、大学という場はぼくにとっては学園生活みたいなものとはほど遠い、完全に利用する場所だったんです。いまの言いかたでいえば「データベース」ですね。専門の先生もいるし、優秀な演奏家もいる。図書館には本も楽譜も揃っている。伝統音楽に興味を抱くと、和楽器について詳しく教えてくれる人が身近にいる。そういう点で効率的な場所だったわけです。

## アートの世界における「作曲家」

ぼくは国内外のアートフェスティバルに参加したりすることも多く、基本的に「アート」と呼ばれる世界がメインのフィールドなんです。

たとえばサウンド・インスタレーションの作品を発表したりしていますけど、



「THE END」より
ill, dir. by YKBX ©Crypton Future Media, INC. www.piapro.net

アートという分野のなかでぼくの特徴は作曲家であることなんです。どういうことかと言うと、僕の作品のほとんどは始まりがあって終わりがあるのですが、これはサウンド・インスタレーションの現場では珍しいのです。だいたいがインタラクティブだったりランダマイズを多用していわゆる「曲」という感じにはならない。だから、ある種古典的な作曲家でもある僕がサウンド・インスタレーションをするということは、アートの世界では個性であり、特異性があるのかもしれないと気づいたんですよね。

藝大では「現代音楽」を勉強していたし、いまもそれを教わっている学生がいると思いますが、本当に「現代の音楽」をつくるなら、一度ドレミを捨てて作曲に向き合う必要があると思います。いわゆる現代音楽家たちが、なかなかドレミを捨てる勇気がないのは、ぼくにとって奇異に感じます。「音をオブジェとして扱う」と、言うのは簡単だけど、それはドレミの原理のなかではできないことです。オブジェとして扱うと言っても、一定の時間の作品をつくるには、何らかの作曲の方法が必要になります。でも、それは未知の方法かもしれない。だからそれが見つけられないと作品にならないかもしれない。それは手慣れた方法で「よく書けてる」とか言われるものを量産するのとは真逆のことです。でもアカデミックなバックグランドがある人にそういう人がなかなかいないのが現状です。

ぼく自身、二〇〇〇年の前後ぐらいに、ピアノや五線譜を一度捨てて、完全にコンピュータにのめりこんだ時期があります。コンピュータによってつくられた音楽が登場したとき、ピアノが発明されたときに生じたのと同じくらい衝撃的なテクノロジーの進歩だと感じたんです。それまでのシンセサイザーはやはり五線譜を活用した楽器でしたから、コンピュータのなかでつくったノイズを組み立て、曲づくりが可能になるのはすごいことだと。これは音楽史上の大きな転換点だから、自分の音楽人生のある時期をここに費やすのは間違いじゃないと思ったんですね。

## 信念をもって続けていくこと

初音ミクが主演したボーカロイド・オペラ「THE END」は、メディアとしての「オペラ」の復活を意図したところはあります。オペラという枠組や形式を否定してきたのが二十世紀であったとすると、二十一世紀はフレームを利用して全く違うところにいく、そういう時代ではないか。二十世紀の初頭には、コクトーやサティやピカソが、コラボレーションの枠組みとしてオペラを利用しました。現在においては、音楽も映像をみんな同じようにコンピュータでつくっているのでコラボレーションが原理的に、より容易になったわけです。「THE END」の発端はそういうことだったと自分では位置づけています。

ところで「THE END」のオーチャードホール（東京渋谷）公演に、藝大の学生も招待したんですけど、いまの学生は総じておとなしいですよね。しかも人の言うことを気にしすぎなんじゃないかと感じるところがある。先生や友人、あるいはネットで、こんなことを言っていたとか言われたといったことを気にする必要なんてないんです。そんなのだれも責任取ってくれないから。絶対にこれをやりたい、なにを言われても成し遂げたい、という信念をもってやっていけば、必ずそれは実現するものだと思うのです。ぼくはそういうふうにしてこれまでやってきたし、これからもそうしていきます。

しぶや・けいいちろう
音楽家。1973年生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。2002年に音楽レーベルATAKを設立、国内外の先鋭的な電子音楽作品をリリース。代表作に「ATAK000+」「ATAK010 filmachine phonics」など。『死なない子供 荒川修作』『はじまりの記憶 杉本博司』など数多くの映画音楽を担当。2012年、世界初の映像とコンピュータ音響による人間不在のボーカロイド・オペラ「THE END」を山口情報芸術センター（YCAM）で制作、発表。2013年5月、東京渋谷のBunkamura・オーチャードホールにて、「THE END」東京公演を開催。同年11月には、パリ・シャトレ座にて同作のパリ公演の開催が決定している。 http://atak.jp

 photo: Hiroaki Horiguchi

藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかは
どうなっているのだろう？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

第六回
# 研究室探訪
Visiting the Laboratory

## 美術学部先端芸術表現科・大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

*Department of Intermediaart*
*Graduate School of Intermediaart Course*

一九九九（平成十一）年四月、茨城県取手市の利根川沿いの取手キャンパスに開設された美術学部先端芸術表現科。旧東京美術学校からの伝統を引き継ぐ上野キャンパスの諸学科に対して、アートの領域を横断し、インターメディアに芸術を学ぶことができる学科として認知されてきた。

今回は先端芸術表現科の開設以来教員を務める、佐藤時啓教授の研究室を訪れ、この学科ならではの演習の様子を取材した。この日、佐藤研究室で行われたのはワークショップの模擬実践と、ゼミ生の作品展示に対する講評会。ゼミではこのほかに、開催中の展覧会をリサーチして、その意義やコンセプトを発表するときもあるそうだ。

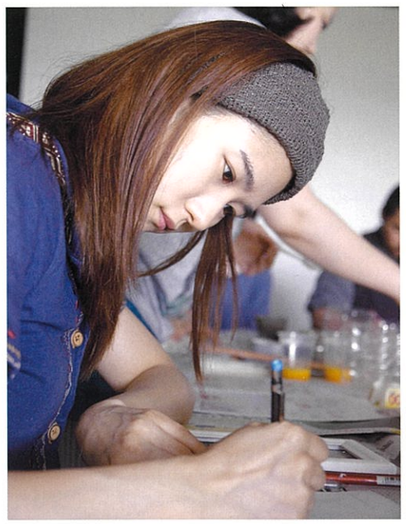
ワークショップの模擬実践は、ゼミ生が個々の表現領域や技法を活かしたワークショップを開いて、教員とほかのゼミ生の批評を受けるというもの。取材当日は博士課程二年で韓国出身の李承禧（イ・スンヒ）さんが、ヨーロッパの古典的絵画技法である「フレスコ」と「テンペラ」を素材からつくり、実際に描いてみようという内容だった。卵黄からつくられる絵具は、フレスコとテンペラの中間的なものだということだが、その光景はまるで料理教室を観ているかのよう。自分の手でつくった絵具を用い、小さな額縁などに学生が描画していく様子は、児童にも楽しめそうに思えた。

「近年、美術館などの展示施設では、多くの人に足を運んでほしいとの理由から、美術家がワークショップを行う機会が増えています。作家にとっても、幅広い層に向けて自身の表現や手法を紹介することができる有意義な場ですから、大学在学中から身につけてもらいたいのです」。佐藤教授がこう説明するように、先端芸術表現科ではさまざまな表現領域に関心をもつ学生が集まることから、「社会」を意識した演習が可能になる。

佐藤教授はさらに、「私自身の表現としては写真をやっているけど、もともとは彫刻科で彫刻を学んでいたということもありますし、二次元と三次元を往き来するような表現に興味をもって作品をつくっています。そんな訳ですから、私のゼミにも、油画や彫刻、あるいは工芸や書道などジャンルを問わず、今日的な芸術表現を模索し、伝統の枠組みを越えた表現を求めて学生は入ってくるのです」と言う。

研究室のガラス壁面を改造した「space 8×8」にゼミ生が作品を展示し、その内容について討議する講評会も、実践的な印象を受けた。取材の際に展示期間中だった米重慧一郎さん（修士課程二年）は、「マチエールにこだわらず、そのとき自分が表現したいものに合わせて素材を変えていきたかった。そんなぼくのスタイルに先端は合っていたのです」という。また書道の世界からゼミ生になった桐生眞輔さん（博士課程五年）は、「書道の世界の閉鎖性に飽き足らず、自分の実践をアートとして高め、広がりをもたせたい」という理由から先端芸術表現専攻の大学院に進んだと説明してくれた。

先端芸術表現科は、表現者であるアーティストに限らず、プロデューサー、キュレーター、ファシリテーターや美術関係の弁護士……など、アートをとりまく様々な人材を輩出している。この学科は、現代の表現にかかわる、すべての活動領域に関心がある人に門戸が開かれているのである。



この日、佐藤時啓教授の研究室では、ワークショップの模擬実践と、ゼミ生の作品展示に対する講評会が行われた。





photo: Hiroaki Horiguchi

# 上野の寄り道散歩道

第8回

# 「登録有形文化財」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある社寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。

## ❶ はん亭

大正六年（一九一七年）
文京区根津二―十二―一五

## ❷ 護国院庫裡

昭和二年（一九二七年）
台東区上野公園十―十八

登録有形文化財は、平成八（一九九六）年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことである。開発などで歴史的資産が消滅するのを防ぐため創設された。建造物では原則建築から五十年を経過し、造形が時代の特色を表現していること、再現が困難なことなどが条件となっている。

文化庁によると、建造物の国登録有形文化財は平成二十五年七月一日現在、九千二百五十件ある。登録対象は当初は建造物にかぎられていたが、平成十六年の文化財保護法改正により建造物以外の有形文化財も登録対象となっている。

東京藝術大学周辺にも、近世近代の上野の歴史を背景にした登録有形文化財の建造物が集まっている。東京メトロ根津駅の駅前、不忍通りと一本東側の小路に挟まれた敷地の小路側角地に建つ串揚屋「はん亭」(1)は、根津のランドマークのひとつともいえる建物。同じ高さの木造階を三層に重ねた、特徴的な町家建築である。

美術学部の敷地に隣接する「護国院」の本堂西側に建つ「庫裡」(2)は岡田信一郎の設計によるもので、昭和初期の住宅建築の風潮をよく伝えるものだと評価される。岡田は東京美術学校・早稲田大学で設計教育に携わるかたわら、旧鳩山一郎邸・旧歌舞伎座などを手がけた。音楽学部の敷地に隣り合う東京文化財研究所「黒田記念館」の本館(3)も同じく、岡田信一郎による。画家黒田清輝の遺言により建設された美術館施設で、二階に展示室が設けられている。外観はスクラッチタイル張りで、正背面二階中央にイオニア式列柱六本を配する（耐震工事のため現在休館中）。

谷中墓地の入口にある「花重店舗」(4)は、谷中墓地の開設とほぼ同時期に開業した生花問屋の建物。一階は店舗、二階は三室に区切って畳敷の居室として利用している。三崎坂から日暮里駅方面に抜ける途中にあるのが「すぺーす小倉屋」(5)。店舗部分の、通り庭に面する帳場を現在はギャラリーにしている。三階建の土蔵も狭い通りによく目立つ。

「観音寺」の「築地塀」(6)は、境内の南面を画するいわゆる練り塀で、瓦と粘土を交互に積み重ねてつくられている。江戸有数の寺町であった当時の谷中の面影を伝えてくれる。

## ❸ 東京文化財研究所 黒田記念館本館

昭和三年（一九二八年）
台東区上野公園十二―五三

## ❹ 花重店舗

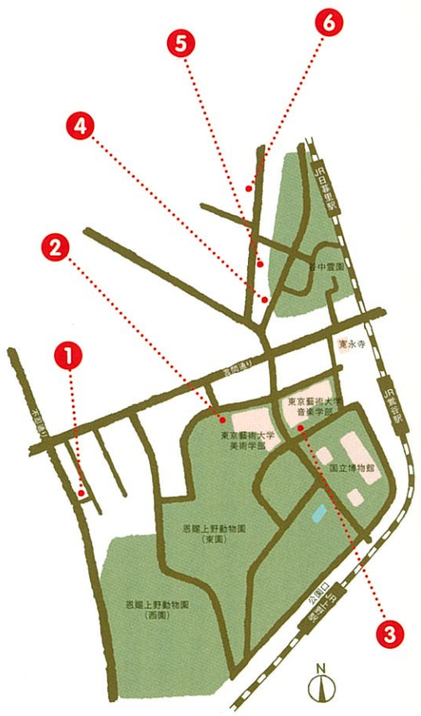
明治十年（一八七七年）
台東区谷中七―五―二七

## ❺ すぺーす小倉屋

店舗：江戸末期
蔵：大正五年（一九一六年）
台東区谷中七―六―八

## ❻ 観音寺築地塀

江戸時代末期
東京都谷中五―八―二八



# 上野の杜の波瀾万丈

## 第十六回 作品展示施設の昔

### 平成十一年に大学美術館が開館するまで、美校・藝大の校内で美術作品を展示することは可能だったのだろうか？

吉田千鶴子

## 校友会倶楽部

およそ美術の学校であるからには、展示施設は不可欠である。しかし、美校開校直後の明治二三（一八九〇）年の頃は、一二、八五四坪強の敷地に東京教育博物館のお古の建物（教場六、一七坪強、事務室七〇坪強、諸建物計二〇〇坪強）と新築の金工・漆工場（一八四坪）、鋳物場（五六坪）、同仕上場（七〇坪）があるのみだった。年とともに教官や生徒、卒業生の制作活動が活発化し、展示施設は是非とも必要になった。しかし、僅少の学校予算では如何ともしがたい。そのためもあって急遽作られたのが校友会倶楽部。校地の南東隅、今、総合工房棟が建っているあたりにあって、総檜造八八坪強の建物だったという。かろうじて残っていた写真と簡略な平面図を上野勝久教授にご覧いただいたところ、平屋建、寄棟造、四周下屋庇、桟瓦葺という構造だという。もとは岡倉天心やビゲロウ、フェノロサらが深く帰依した三井寺法明院住職の桜井敬徳僧都のために、富豪のビゲロウが小石川原町に「円密道場」を建てて寄進しようとし、その骨組みができるかできないかの時、敬徳が遷化（明治二二年一二月）、また、ビゲロウも帰国して計画が宙に浮いてしまったため、天心の先輩官僚で美校商議委員でもあった高嶺秀夫が仲介の労をとって明治二五年の夏に美校が譲り受け、移築・完成させたものだった。

この建物は校友会の会合や展覧会によく使われたらしい。明治二、三〇年代の東京にはまだ作品展示に相応しい施設はなく、比較的多数展示できる施設としては上野公園竹の台、つまり今の噴水と都美術館の中間あたりにあった旧博覧会五号館（のち竹の台陳列館と改称）と日本美術協会の陳列場があったくらいで、小規模の展示には附近の料亭などが使われた。一般の美術団体が最もよく使った旧博覧会五号館は第三回内国勧業博覧会のときに作られた建物の一つを管轄者の帝国博物館が展示施設として残したもので、いわば長い掘っ立て小屋のようなものだったが、大正一五（一九二六）年に東京府美術館（今の都美術館）ができるまでは、皆やむなくそこを使った。

そのように侘しい情況であったから、校友会倶楽部の存在価値は大きく、歴史的意義のある展覧会も開かれた。たとえば、まず明治二五年秋の日本青年絵画協会第一回共進会の開催である。この会は諸画塾の若手門生たちが天心校長を会頭に戴いて結成したもので、四年後の二九年春に美校絵画科卒業生下村観山、横山大観、菱田春草ほかの面々と連携して日本絵画協会（天心副会頭）に発展、展覧会を重ねて日本画革新派としての鮮やかな足跡を記し、それが院展と文展日本画部門へと繋がって行く。また、日本近代彫刻史上最初の革新団体として歴史に登場する青年彫塑会（天心会長）が明治三〇年秋に旗揚げの展覧会を開いたのもここである。美校彫刻科卒業生たちの意欲作と教官の応援出品作四〇余点が展示され、彫刻革新の気運を世に告げた。同三四年には同会の後身に当たる彫塑会が第二回展をここで開くに当たって、竹の台方面から来て美校正門（今の正木記念館と黒田記念館の間あたりにあった）を通らず直接倶楽部へ行けるようにと、動物園寄りの校地境界土手を削って木造黒漆塗りの門を作り、美校に寄附した。日本橋麒麟像の作者として名を残す渡辺長男が寄附者代表となっている。なお、美校の卒業制作や平常制作、特別企画展の展示には教室が使われた。

この歴史的意義のある倶楽部が芸大大改築計画のため昭和三〇年代半ばに取り壊されてしまったのは残念だが、考えてみれば大正三年の校舎全面改築・開校満二五年記念式典の際の卒業生賛助会の醵金による大幅な増改築（平屋建二七坪強、二階建二二坪強増築）や昭和七年和田英作校長時代の大修理があっただけでなく、敗戦直後には家屋を失った教官や生徒、卒業生が住み着き、荒れ放題となっていたから、取り壊さざるを得ない状態だったのだろう。

## 美術館を美校内に建設？

美術界待望の東京府美術館が完成したのは大正一五年五月である。それは、美術界からの度重なる美術館建設要求に対して予算がない旨の回答を繰り返していた東京府知事に、突如福岡県若松市の篤志家佐藤慶太郎が建設費百万円を寄附したことにより建設計画が始まったものだが、最初は府が美校敷地の一部を借りて建てる予定だった。本学に残る「東京府美術館建設敷地関係書類」によると、大正十二年七月に宇佐美勝夫東京府知事が美校校長正木直彦に校地借用願いを提出している。それを見ると、美校敷地の東南二〇〇七坪強に屏風坂通り向きに三つの階段エントランスをもつ一二六六坪の建物を作る計画だったことが分かる。それを正木は美校の展示に便宜を図るなど種々の条件付きで承諾し、文相も許可を下した。しかし、美術館が出来ると美校は敷地を大幅に狭められることになり、美術館としては面積が足りないなど、最初からこの計画には無理があったらしく、大正一三年一月の正木宛府知事文書では早くも計画を中止し、上野公園内二本杉原の土地四〇〇〇坪（今、都美術館が建っている土地）を無償借用する許可が下りたという告知がなされている。かくて府美術館は美校建築科教授岡田信一郎設計監督、大林組の工事請負により八四万円を費やして建設され（のち増築、一九七五年全面改築）、美校の隣りに威風堂々たる姿を現わしたのであった。この建物は後述の美校陳列館、隣りの黒田記念館とともに岡田信一郎の美術館三部作と称されたものだ。

## 文庫・陳列館・正木記念館

新作のみならず教育・研究の参考標本（古美術その他）の展示施設を設けて美校内外の人々の観覧に供したいということは天心校長が早くから唱えていたことだが、彼の失脚後、美校当局はその遺志を受け継いで、明治三三年から「東京美術学校年報」において陳列場ないし陳列館新設の要請を始めた。要請文のうち特に同三九年のもの（『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇第二巻三三一頁所載）は、翌年開始と決まった校舎大改築の一環として参考標本展示と生徒成績品展示のための陳列館を新設して欲しいという、熱誠溢れる文であって、一読をお勧めしたい。しかし、その後、旧帝国図書館の敷地・建物の移管を受けてできた文庫（今の赤レンガ一、二号館）の一部に参考標本を少々展示できるようにはなったものの、陳列館新設要請は一向に認可されず、三〇年近く涙ぐましい要請を続けた挙句、漸く四万円余りの小額予算が下りて、昭和四（一九二九）年三月に今の陳列館が完成した。建設の際、正木直彦は文部省建築課の建築技能に信を置かず、美校が直接建築に当たる旨が早くから唱えていたことだが、彼の失脚後、美校当局はその遺志を受け継いで、明治三三年から「東京美術学校年報」において陳列場ないし陳列館新設の要請を始めた。要請文のうち特に同三九年のもの（『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇第二巻三三一頁所載）は、翌年開始と決まった校舎大改築の一環として参考標本展示と生徒成績品展示のための陳列館を新設して欲しいという、熱誠溢れる文であって、一読をお勧めしたい。しかし、その後、旧帝国図書館の敷地・建物の移管を受けてできた文庫（今の赤レンガ一、二号館）の一部に参考標本を少々展示できるようにはなったものの、陳列館新設要請は一向に認可されず、三〇年近く涙ぐましい要請を続けた挙句、漸く四万円余りの小額予算が下りて、昭和四（一九二九）年三月に今の陳列館が完成した。建設の際、正木直彦は文部省建築課の建築技能に信を置かず、美校が直接建築に当たる旨文部省に申し入れ、設計は前出の岡田信一郎が担当して展示向きの無窓壁・天窓採光構造、鉄筋コンクリート造二階建、外壁スクラッチタイル貼りの建物（建坪六五坪）が作られたのであった。開館から半年ばかりたった頃、正木は大英博物館東洋部長ローレンス・ビニョン夫妻やドイツ大使夫妻、サムスン夫妻を陳列館の古物展示と文庫の絵画展示に案内し、また、李王殿下を陳列館の楽出土品展示に案内したことなどを日記に記している。長年の努力の結実であるこの建物に資客を案内できることを正木は誇りに思ったことだろう。なお、昭和一〇年には正木記念館が完成、その一階が展示室となり、大学昇格後の同四一年に芸術資料館が完成して展示場（兼通路）が設けられ、平成十一年に至って一躍大学美術館の開館となる。その間の経緯はまたいずれ適任者が紹介してくれるだろう。

（藝大総合芸術アーカイブセンター特別研究員・美術学部教育資料編纂室）

1

2

3

4

1. 美校校友会倶楽部　取り壊し寸前に撮影されたものらしい。
2. 東京府美術館
3. 美校文庫閲覧室
　展示コーナーが設けられ芳崖作「不動明王」が展示されている。
4. 美校陳列館　完成直後に撮影されたものらしい。

# Exhibition & Concert

Information 展覧会 & 演奏会 情報

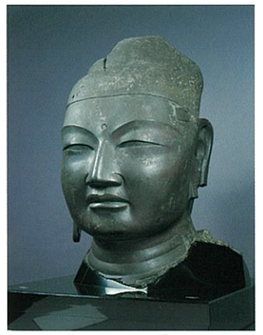
TOPIC 1

## 興福寺創建1300年記念　国宝 興福寺仏頭展

奈良・興福寺の創建1300年を記念して「国宝 興福寺仏頭展」を開催します。

展覧会では興福寺東金堂をテーマとし、同寺の代表的な名宝である国宝「銅造仏頭」(白鳳時代)をはじめ、東金堂ゆかりの名品を展示します。「仏頭」の眷属(けんぞく)として造られた国宝「木造十二神将立像」(鎌倉時代)、浮彫の最高傑作として有名な国宝「板彫十二神将像」(平安時代)の各12点、計24点が初めてそろって登場するほか、法相宗に関わる至宝も展示。「仏頭」と同じ白鳳仏として、東京・調布の深大寺所蔵の重要文化財「銅造釈迦如来倚像」も特別陳列され、国宝25点、重要文化財31点など約70点の至宝が集う豪華な展示となります。

ヴァーチャル・リアリティー(VR)技術を使って、仏頭頭部の復元に挑むとともに、同寺で進む中金堂再建事業についても紹介します。



右：国宝「銅造仏頭」白鳳時代、興福寺蔵
左：国宝「迷企羅大将像(板彫十二神将)」平安時代、興福寺蔵

### 展覧会スケジュール (2013年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

**本館**

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 9月 3日(火)～11月24日(日) | 興福寺創建 1300 年記念　国宝 興福寺仏頭展 | 入場料：一般1,500円　学生1,000円(中学生以下は無料) |
| | 12月15日(日)～12月24日(火) | 東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展 | 入場料：無料 |
| | 1月 6日(月)～ 1月19日(日) | 佐藤一郎退任記念展(仮称) | 入場料：無料 |
| | 1月 6日(月)～ 1月19日(日) | 「見ること・描くこと」油画技法材料研究室とその周縁の作家達(仮称) | 入場料：無料 |
| | 1月26日(日)～ 1月31日(金) | 第 62 回東京藝術大学卒業・修了作品展 | 入場料：無料 |
| | 3月21日(金・祝)～4月13日(日) | 藝大コレクション展(仮称) | 入場料：未定 |

**陳列館**

| | | |
|---|---|---|
| 9月 2日(月)～ 9月12日(木) | Ichiken ten 2013 ― 東京藝術大学 日本画第一研究室 発表展 ― | 入場料：無料 |
| 9月24日(火)～10月 6日(日)(予定) | 日中「東洋茶文化交流事業」 | 入場料：無料 |
| 10月23日(水)～10月30日(水) | 伝統と現代―漆芸展 | 入場料：無料 |
| 11月 上旬(予定) | 大宮東口プロジェクト展(仮称) | 入場料：無料 |
| 11月14日(木)～11月26日(火) | 元倉眞琴退任記念「都市への愛・キャンパスへの愛」展 | 入場料：無料 |
| 12月 6日(金)～12月18日(水) | 第４回東京アートミーティング(仮称) | 入場料：無料 |
| 1月 6日(月)～ 1月19日(日) | 「見ること・描くこと」油画技法材料研究室とその周縁の作家達(仮称) | 入場料：無料 |
| 1月26日(日)～ 1月31日(金) | 第62回東京藝術大学卒業・修了作品展 | 入場料：無料 |
| 3月15日(土)～ 3月21日(金・祝) | 和鉄　たたらと鍛冶　永田和宏退任展 | 入場料：無料 |

**正木記念館**

| | | |
|---|---|---|
| 9月 2日(月)～ 9月12日(木) | Ichiken ten 2013 ― 東京藝術大学 日本画第一研究室 発表展 ― | 入場料：無料 |
| 11月12日(火)～11月24日(日)(予定) | 平櫛田中コレクション2013 | 平櫛田中記念室 開室(仮称) | 入場料：無料 |

※ 開館時間は、10:00～17:00(入館時間は16:30まで)。月曜休館。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先
- ハローダイヤル　TEL：03-5777-8600
- 大学美術館　TEL：050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
http://www.geidai.ac.jp/museum/



### 演奏会スケジュール (2013年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

**奏楽堂**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 10月 5日(土) | 藝大オペラ定期第59回(チマローザ：秘密の結婚) | 14:00開演 | S席：5,000円　バルコニー席：4,000円　指定席 |
| | 10月 6日(土) | 藝大オペラ定期第59回(チマローザ：秘密の結婚) | 14:00開演 | S席：5,000円　バルコニー席：4,000円　指定席 |
| | 10月 9日(水) | 和楽の美　邦楽絵巻「弁財天縁起」 | 18:30開演 | S席：5,000円　A席：4,000円　指定席 |
| | 10月10日(木) | 学生オーケストラプロムナードコンサート6 子どもと楽しむオーケストラ | 16:30開演 | 無料(3歳から入場可能)　自由席 |
| ② | 10月12日(土) | 藝大プロジェクト2013「消える昭和～その時、世界は？」Ⅲ<br>テレビと音楽～放送から見える昭和 | 15:00開演 | 2,000円(セレクト券：2枚・3,000円、3枚・4,500円あり)<br>自由席 |
| | 10月19日(土) | 音楽学部附属音楽高等学校第25回定期 | 14:30開演 | 無料(事前申込制)　自由席 |
| | 10月20日(日) | 上野の森オルガンシリーズ　異国のJ.S.バッハ・イタリア編 | 15:00開演 | 2,000円　自由席 |
| | 10月25日(金) | 藝大フィルハーモニア定期(藝大定期第359回)＋うたシリーズ<br>生誕200年「ヴェルディとワーグナー」 | 19:00開演 | 3,000円　指定席 |
| ② | 10月26日(土) | 藝大プロジェクト2013「消える昭和～その時、世界は？」Ⅳ<br>ビートルズからワールドミュージック | 15:00開演 | 2,000円(セレクト券：2枚・3,000円、3枚・4,500円あり)<br>自由席 |
| | 10月27日(日) | 東京藝術大学・ジュネーヴ音楽大学交流演奏会 | 15:00開演 | 3,000円　自由席 |
| | 11月 2日(土) | 学長と語ろうXⅣ　ゲスト：夢枕獏(作家) | 15:00開演 | 無料(往復ハガキによる申込制)　指定席 |
| | 11月16日(土) | 藝大フィルハーモニア合唱定期(藝大定期第360回) | 18:30開演 | 2,000円　自由席 |
| | 11月23日(土・祝) | 藝大定期吹奏楽第79回 | 14:00開演 | 1,500円(高校生以下500円)　自由席 |
| | 11月27日(水) | 藝大定期邦楽第80回 | 18:00開演 | 2,000円　自由席 |
| | 11月28日(木) | 学生オーケストラ定期第49回(藝大定期第361回) | 19:00開演 | 1,500円　自由席 |
| | 11月30日(土) | 藝大アーツスペシャル～障がいとアーツ「聞こえる色、見える音」第1日 | 未定 | 無料(事前申込制)　自由席 |
| | 12月 1日(日) | 藝大アーツスペシャル～障がいとアーツ「聞こえる色、見える音」第2日 | 未定 | 無料(事前申込制)　自由席 |
| | 2月 1日(土) | 藝大定期室内楽第40回 第1日 | 14:00開演 | 1,500円　自由席 |
| | 2月 2日(土) | 藝大定期室内楽第40回 第2日 | 14:00開演 | 1,500円　自由席 |
| | 2月11日(火・祝) | 東京藝大チェンバーオーケストラ定期第22回 | 15:00開演 | 1,500円　自由席 |
| | 3月20日(木) | 多田羅迪夫退任記念演奏会 | 18:30開演 | 無料(申込手続き未定)　自由席 |
| | 3月28日(金) | 第8回奏楽堂企画学内公募演奏会 | 19:00開演 | 無料　自由席 |

モーニング・コンサート　9月12日(木)、11月21日(木)、11月28日(木)、2月20日(木)　11:00開演　1,000円(※ 入場整理番号付き)　自由席

※ 特にお断りのない限り、コンサートの会場はすべて本学構内の奏楽堂です。
※ 詳細につきましては、9月末発行予定の「平成25年度コンサートスケジュール(後期版)」をご覧ください。
※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。http://www.geidai.ac.jp/
※ 特に記載のあるものを除き、乳幼児等の就学前のお子様の同伴・入場はできませんのでご了承ください。
※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。
※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。
※ チケットの取り扱い
- 藝大アートプラザ　TEL：050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター　TEL：03-5355-1280　http://ticket.votre.co.jp/
- チケットぴあ　TEL：0570-02-9999　http://t.pia.jp/
(一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス　TEL：03-5685-0650　http://t-bunka.jp/ticket/
- イープラス(e+)　http://eplus.jp/

※ 演奏会についてのお問い合わせ先
- 演奏藝術センター　TEL：050-5525-2300

2013年6月16日(日)「消える昭和～その時、世界は？」第2回「戦争の世紀②～東西冷戦と音楽」公演より

TOPIC 2

## 藝大プロジェクト2013「消える昭和～その時、世界は？」シリーズ

2011年にスタートした藝大プロジェクト「その時、世界は?」シリーズ。「元禄時代」「幕末」と時代を下り、3年目の今年はいよいよ「昭和」の時代を取り上げています。前期は20世紀に人類が体験した2つの世界大戦に着目し、「戦争の世紀」と題して、《退廃芸術》と《東西冷戦》をテーマに2回のレクチャー&コンサートを開催いたしました。

後期は打って変わって、より親しみやすい角度から「昭和」そして「20世紀」を捉えます。第3回「テレビと音楽～放送から見える昭和」(10月12日)は、今年がテレビ放送開始60周年であることから、昭和のエポックをテレビの発達史との関連でたどる企画。〈皇太子ご成婚〉〈東京オリンピック〉など、懐かしい音楽と映像がいっぱいです。そして最終回「ビートルズからワールドミュージック」(10月26日)では、20世紀のポピュラー音楽史に燦然と輝くビートルズの音楽を、藝大ならではのユニークな視点で俎上に乗せます。どうぞお楽しみに……。

# News 2013.02 —2013.07

## 受章・受賞

◆深井隆教授が「紫綬褒章」を受章

美術学部彫刻科の深井隆教授が、平成二十五年春の褒章において、紫綬褒章を受章した。

◆三田村有純教授が「第五十二回日本現代工芸美術展 内閣総理大臣賞」を受賞

美術学部工芸科（漆芸）の三田村有純教授が、第五十二回日本現代工芸美術展において、内閣総理大臣賞を受賞した。

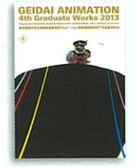
◆野平一郎教授が「第六十一回尾高賞」を受賞

音楽学部作曲科の野平一郎教授が、第六十一回尾高賞を受賞した。受賞作品は「彼方、そして傍らに～ハープと室内オーケストラのための～」

## 出版会活動

◆DVD『アニメーション専攻 第四期生修了作品集2013』を三月八日より発売

横浜に拠点を置く大学院映像研究科アニメーション専攻。第四期生修了制作十五作品と、一年次制作十三作品を収録したDVDを販売。独創性に富んだ十五の視点から、学生たちが二年間を費やして探究した「アニメーション表現との対話」。その成果物として生まれた作品群からは、アニメーション芸術の次のステージを予感させる。




◆DVD『映画専攻 第六期生修了作品集2012』を七月一日より発売

大学院映像研究科映画専攻の第六期生修了制作作品集。当DVD収録の『虚しいだけ』は、第六回田辺弁慶映画祭にてグランプリを獲得し、テアトル新宿にて劇場公開された。また他の三作品も国内外の映画祭や劇場にて上映され、現在も大きな注目を集めている。監督・製作・脚本・撮影照明・美術・サウンドデザイン、編集、それぞれの領域の学生が、集大成として取り組んだ修了制作作品集となっている。

東京藝術大学出版会の出版物等は、藝大アートプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇―五五二五―二一〇二）まで

## 運営

◆平成二十四年度卒業式

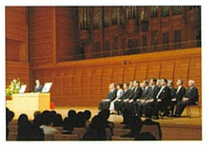
三月二十五日（月）、奏楽堂にて平成二十四年度卒業式が実施された。

学長式辞では、「火（ひ）」と「重（ぐん）」とが重なった「輝（かがやく）」という文字を、「きらめきを心の中に持ち志を同じくする仲間と一緒に前進することで、素晴らしい『かがやき』を得るに至った今日のあなたたちを表した文字」と説明し、「藝大で培ったその輝く力で、大いに世の中に影響を与えていってもらいたい。また『かがやき』を失いかけている人がいたら、自らの『かがやき』を甦らせ、共に素晴らしい世界を作っていくことも、あなたたちの使命だ」と、広い世界へと旅立つ若者たちを激励した。

◆平成二十五年度入学式

四月五日（金）、奏楽堂にて平成二十五年度入学式が挙行された。

学長式辞では、宮田学長が式辞の最中に壇上で「作」という文字を揮毫し、「小枝を束ねて垣根を作る様子を表すこの字は、一人一人が団結して物事に取り組み、掲げる理念を形にすることにも通じている。これからの学生生活はあっという間に過ぎるのだから、明日と言わず、この文字が示すような心をもって、今からすぐに前進を始めてもらいたい」と述べ、大学生活のスタートを切る学生たちにエールを送った。



◆「学長と語ろう こんさーと」

ゲストに元横綱・北勝海の八角信芳氏を招き、六月二十二日（土）、第十三回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場の本学奏楽堂では、九百名を超えるお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

「伝統をまもる！」をテーマにした第一部のトークでは、八角親方の現役時代、休場した際のリハビリの苦労などが語られた。また、スクリーンに優勝決定の取り組みなどが流されると、客席からは拍手が沸き起こっていた。

第二部のコンサートでは、藝大シンフォニーオーケストラによるベートーヴェン《交響曲第五番》「運命」（指揮・澤和樹教授）、松下功 交響詩《相撲甚句》（指揮・松下功教授）が演奏された。交響詩《相撲甚句》では、勢関、鶴乃湖、安芸乃川の三力士が登場し、見事な美声を披露した。

◆下村文部科学大臣が本学を視察

下村文部科学大臣が四月十九日（金）、本学を訪問し、宮田学長等との懇談及び学内施設の視察を行った。

学長室での懇談では、宮田学長、渡邊理事、北郷理事、畑中理事、越川副学長、澤副学長から藝大の活動や今後の展望について話をするとともに、文化芸術の振興について意見交換を行った。

学内視察では、奏楽堂、文化財保存学日本画研究室、彫刻科、工芸科鍛金研究室、陳列館を視察し、最後に藝大アートプラザを訪問し、教員等の作品を鑑賞した。

◆文化庁長官が「夏目漱石の美術世界展」を鑑賞

近藤文化庁長官（当時）が五月十六日（木）、本学を訪問し、大学美術館の展覧会「夏目漱石の美術世界展」を宮田学長、古田大学美術館准教授の案内によって鑑賞した。

展覧会は開幕3日目で、午前中にも関わらず多くのお客様がご入場されているなか、近藤長官は古田准教授の説明に熱心に聞き入りながら、全展示室を鑑賞した。

当初は展覧会鑑賞後、お帰りになる予定だったが、急遽、美術学部絵画棟で行われていた絵画科油画専攻の講義（国際的に活躍できる芸術家を見据えての実践的な英会話の講義）を保科美術学部長、絵画科坂口教授の案内で視察した。

視察中には講義に飛び入り参加し、学生に対して、外交官時代の経験から、国際社会においては、語学を駆使して自分をアピールできることがとても重要なので、ぜひ頑張って学んでほしいとメッセージを送っていた。

◆第五十九回五芸術大学体育・文化交歓会（東京大会）を本学で開催

五月二十三日（木）から二十六日（日）までの四日間、本学にて第五十九回五芸術大学体育・文化交歓会（通称：五芸祭）が開催された。

今年のテーマは「depARTure」。ARTを内包したこのテーマ「depARTure」には、芸術というアプローチから新たな社会の変革の先陣を切って行きたいという意味が込められている。二〇〇九年の前回東京大会が新型インフルエンザの影響で開催中止となったため、八年ぶりとなった東京大会は、総合工房棟ウッドデッキで行われた開会式で華やかに開幕し、学生による作品展、アートマーケット、講演会、五校企画イベント、四校合同演奏会やスポーツ競技で四日間大いに盛り上がり閉会した。

◆今年度上半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

《大学美術館》

**FENDI - UN ART AUTRE**
**Another Kind of Art,**
**Creation and Innovation in Craftsmanship**
**～フェンディ もうひとつのアート、クリエイションとイノベーションの軌跡～**
会期　四月三日～四月二十九日
入場者数　一万五三一五名

**藝大コレクション展 春の名品選**
会期　四月五日～五月六日
入場者数　二万六百七名

**夏目漱石の美術世界展**
会期　五月十四日～七月七日
入場者数　七万四五一八名

《奏楽堂》

**藝大フィルハーモニア定期**
**新卒業生紹介演奏会**
開催日　四月十九日
入場者数　七九七名

**「消える昭和～その時、世界は？」第1回**
**戦争の世紀①～二つの戦争のはざまで**
開催日　五月十八日
入場者数　二三一名

**第四十八回藝大学生オーケストラ**
（藝大定期第三五七回）
開催日　五月二十三日
入場者数　七百二名

**藝大21 創造の杜2013**
**藝大現代音楽のタベ**
開催日　六月七日
入場者数　四百八名

**「消える昭和～その時、世界は？」第2回**
**戦争の世紀②～東西冷戦と音楽**
開催日　六月十六日
入場者数　二九二名

**藝大フィルハーモニア定期**
**（藝大定期第三五八回）**
開催日　六月二十一日
入場者数　六七八名

**東京藝大チェンバーオーケストラ**
**第21回定期演奏会**
開催日　六月二十九日
入場者数　六六一名

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数（平成二十五年七月三十一日現在）
賛助フレンズ　個人四二三名
　　法人団体四社
特別賛助フレンズ　個人十三名

## 藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜りました皆様に、心より深謝申し上げます。本号では、藝大基金を創設致しました平成二十四年十月四日から平成二十五年七月末日までに寄附申込いただいた皆様を掲載させて頂きます（掲載をご承諾いただけた方のみ）。

東京藝術大学は、皆様からのご支援により支えられています。末永くご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

《個人の皆様》

小瀬村幸子様　一千万円
（本学元オペラ研究部演奏研究員）
小薬正男様　百万円
西川こずえ様　十万円
森脇慎也様　一万円

《法人の皆様》

FENDI ADELE S.R.L.様　一千三八万一六五〇円
大日本印刷株式会社様　一千万円
日本国土開発株式会社様　一千万円
松陰神社様　五十万円
上野製薬株式会社様　三十万円
株式会社アサツーディ・ケイ様
第一工業株式会社様

お問い合わせは総務課渉外事業企画室
050-5525-2025
藝大基金WEBサイト
http://fund.geidai.ac.jp/

◆「藝大通信」編集部では、皆様からのご意見・ご感想などお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒一一〇―八七一四　東京都台東区上野公園十二―八
東京藝術大学総務課内　藝大通信編集部
ファックス 03-5685-7760　E-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp

### 第27号刊行にあたって

決められた方向性の中でどなたに話しをうかがえばよろしいか、様々な角度から検討され会議の中で粛々と決められてゆく。

今号も実に振り幅の大きい豊かな人選となり、読み応えがある。ただ私たちはこの貴重な資源を誰に向かって発信しているのか、私たちが持つべき情報発信力の中でこの雑誌の位置と効果とはどのようなものなのだろうか、この辺で今一度考えてみる必要があるだろう。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト（http://www.geidai.ac.jp/）をご覧ください。

● 展覧会についてのお問い合わせ先
東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600

● 演奏会についてのお問い合わせ先
東京藝術大学演奏藝術センター
Tel. 050-5525-2300

● 演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel.03-5355-1280
チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
（一部携帯電話・PHS・IP 電話はご利用いただくことができません。）
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650
イープラス（e+）
http://eplus.jp/

● 藝大アートプラザのご案内
Tel. 050-5525-2102